「つちのいえ」雑感

秋山　陽

西山の麓に点在する柿畑や民家の間を縫うように走る細い道の一角に、突如出現した赤い土壁に気付いたのは随分以前のことです。それが「つちのいえ」の前身にあたるプロジェクトの成果であり、「峠の茶屋」と呼ばれることを知ったのはその後のことでしたが、赤土の明るく暖かい表情があたりの雰囲気を一変させていたことを今も覚えています。

私は自身の制作に用いる陶土に、大地や地面や土壌など「土」という言葉が内包する多様で豊饒な世界を見ようとしてきました。それゆえにテーマ演習「つちのいえ」が始まった時、自ずから私も反応していました。そして、様々な植物や小動物達が季節の移ろいと共に現れたり消えたり、生まれたり死んだりする丘の上で、版築・日干し煉瓦・茅葺きなど、その時その時の作業に学生達といっしょに汗を流すことを楽しむようになりました。残念ながら、つなぎ姿で丘へと向かう学生達を少し羨ましい気分で見送ることも多かったのですが、都合がつく時だけの気ままな参加者であった私にとっても、木曜午後は特別な時間でした。梢を通り抜ける風の音や小鳥のさえずりや眼下の音楽棟のあちこちから聞こえてくる学生達の演奏が入り交じると、丘の上は別天地の趣きがありました。

振り返ると私は「つちのいえ」で多くの大切なことを学ばせて頂きました。
それを私なりに整理してみると次のようになります。
頭だけではなく手で考えること。そして労働の喜び。
生活の場の周辺にあるものから発想したり、それを工夫して用いること。
人が人を呼ぶ好循環の中で、個個の知恵や技術や経験が交換され共有されること。

長らく「つちのいえ」を育むことに情熱を注いでこられた井上先生の思いがそこに投影されています。この掛け替えのない場が沓掛の地、芸大の一角にあることを私も参加者のひとりとして誇らしく思っています。

（陶芸家・京都市立芸術大学名誉教授）

日干しレンガ積みの指導
2011/6/9

恒例の年末囲炉裏会にて
2014/12/26

丹波の秋山工房前で茅を刈り集める。2017/5/4